園長あいさつ

大森山動物園、50年の歩みを振り返り

園　長　小松　守

2023年のシーズンに大森山動物園は開園50周年を迎える。1973年に千秋公園の児童動物園を引き継ぎ、大森山動物園として誕生、成長してきた50年は、1,200万人を超えるご来園の皆様、動物園と様々関わって頂いた方々の思いが詰まった時間とも言える。動物園の歩みを振り返ることは、未来に思いを広げる力にもなるはずだ。限られた紙面だが、48年という長い間、動物園に関わり続けることができた者として、私なりに経営的な視点で50年を俯瞰してみた。

大森山動物園の誕生は秋田の人々の子どもへの思いから誕生している。戦後に制定された都市公園法は全国の公園づくりを促進させた。秋田市は公園づくりのテーマに子どもの豊かな心を育む「こどもの国」を掲げ、1968年に公園構想を発表した。その場に大森山が選定され、公園づくりの核に動物園建設を組み込んだのは、手狭などの課題を抱えた児童動物園があったからだろうし、そうでなければ今の大森山動物園はなかったかもしれない。

1971年10月、市は予算約5億円の動物園建設計画を発表。将来はゾウなども導入したい考えが当時の新聞記事になっている。1973年9月1日、動物園は大森山公園と同時に華々しくオープン、来園者の笑顔だけでなく、同年11月末の冬季閉園までの入園者数が13万人近くだったことは期待の大きさを表している。

開園後もシマウマやカンガルーなどの動物導入を年次的に進め、さらに1981年には今も人気のサル山をオープンさせた。この頃には、中国蘭州市から友好都市提携の記念としてラクダが、サンパウロ秋田県人会からブラジル産のパカが、さらに同会から1988年に再び新世界ザルが贈られた。一方、開園後数年で園は現在の恒例イベントであるサマースクールや写生大会を開始し、動物展示以外でも期待に応えようとしていた。

動物園が充実してゆく中、大森山でのゾウ飼育展示を夢見る市民の声も聞かれるようになった。時は秋田市制100周年が間近の頃で、動物園はこれに合わせ1985～6年頃にゾウとキリンの導入について、用地選定や動物舎設計、飼育の体制強化や動物確保なども検討、新動物園づくりに匹敵する仕事が山積した。市の理解を得て大型

動物導入事業として園内南側山林を切崩し土地造成が始まったのは市制100周年の1989年、そして1991年春に展示が始まった。新動物園建設計画発表から20年が経っていた。この年の入園者数は過去最高の35万人、市民の動物園への注目度が高まる中、1990年に園独自の情報誌「コミュニケーション」が発行された。スタッフも奮い立っていたのだ。

ところで、大型動物導入事業費の約6億円と1973年開園当時の動物園建設費約5億円の単純比較はできないが、ゾウとキリンの導入は実に大事業でもあり、財源の確保のこともあり動物園はこの時に特別会計に移行し、現在に至っている。

こうした勢いは次に動物とのふれあいサービスの充実に向けられ、1997年に「ふれあいランド」ができた。このサービスの充実で動物園と学校等との関わりが深まり、動物園の教育的役割を意識するようになった。この整備完了で動物園の形や運営スタイルが現在とほぼ同じになった。開園から約25年を要したのだ。

開園30周年目前の2002年、動物園を大きく揺さぶり、転機につながってゆく出来事があった。前脚を骨折した子キリンが義足をつけて懸命に生きた「義足のキリン・たいようの物語」である。社会反響も大きく、様々な書籍やTVドキュメント、さらには道徳の教科書にも取り上げられた。いのちと懸命に向きあった大森山動物園の存在意義を多くの人が考えるきっかけになった。翌年の30周年記念式典後、子どもたちが園内で「青空シンポジウム」を開

千秋公園の児童動物園

き、未来の動物園を話し合った。2005年には大森山動物園の役割について、子どもや大人がシンポジウムを開き、そのあり様を考えた。これらは同年の「秋田市大森山動物園条例」の制定に結び付き、翌年1月に施行、「雪の動物園」も正式に開園した。

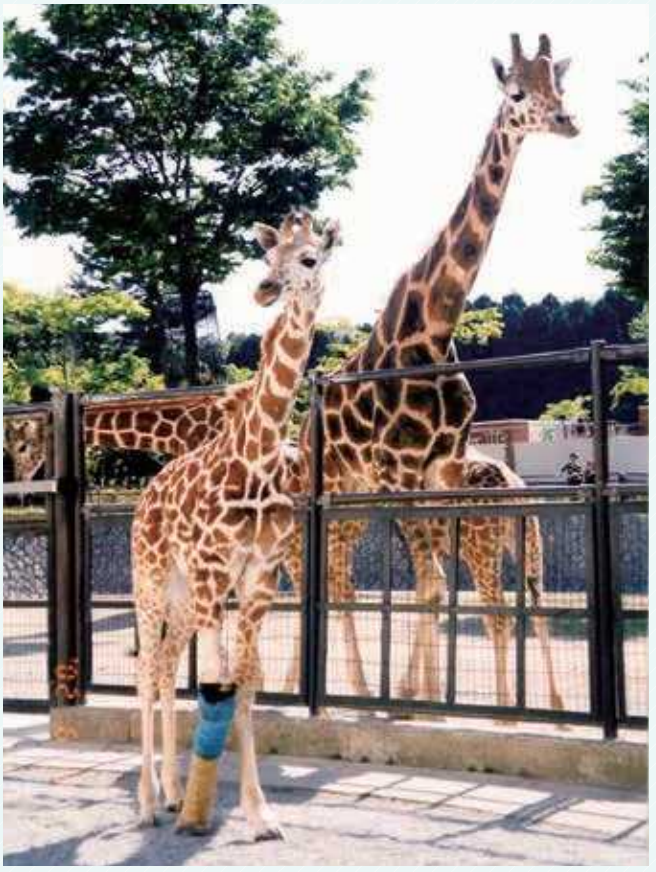
こうした活動は30年が経過し老朽化が始まった園施設の計画的再整備に大きな影響を与えたのかもしれない。2007年の研修室含む新管理事務所「ミルヴェ館」、2008年の動物病院「森のびょういん」、2009年の「アソヴェの森」建設整備へと続いた。2010年頃から公園事業でゲート改修が検討され、2014年にはゲート機能を持ったビジターセンターができ、来園者サービスが大きく改善された。そして2021年には冬でも暖かい室内からガラス越し暮らすサルの見学ができる新サル舎「天空の楽猿（らくえん）」もできた。

整備と並行し2007年に「秋田の動物園を語る」市民シンポジウムが秋田大学と連携し開催され、大森山動物園の将来が話し合われた。2009年には市民参加での動物園の将来を構想する委員会が開かれ、翌年公園と動物園の一体的再整備を描いた「大森山自然動物公園（仮称）整備構想」が示された。見直しを経て2021年には構想は「大森山公園整備基本計画」に格上げされた。大森山公園と融合し発展する動物園づくりが展望されている。

こうした発展は、例えば希少動物の繁殖や動物管理のためのトレーニング開発など動物飼育の実績、「まんまタイム」やエサやり体験などのサービスの充実、園独自の積極的な情報発信など、園活性化に取り組んできた現場力の成長とともにあった。2015年から始まった秋田公立美術大学と連携した「大森山Arts & Zoo（現：アートプロジェクト）」や2016年の秋田銀行によるネーミングライツ・パートナーの導入なども追い風にもなった。

何よりのこの発展を支えたのは、ファンやボランティアなど市民の動物園への思い、市組織全体の理解、そして様々な試練を乗り越えお客様や動物と向き合い続け挑戦してきたスタッフの存在、言い換えるとそれぞれの人たちが「動物園は大切な場だよね」という思いの総和と私は考える。動物園づくりで忘れてはならない大事なことだ。

この50年で動物園を取り巻く社会、経済、自然環境は激変した。不安定で混沌とした時代ほど、人と動物が共に生きることの大事さを感じる動物園の存在は大きくなるだろう。動物園の未来を考える時、この本質も忘れてならない大事なものだ。大森山動物園は、機関誌名「コミュニケーション」やテーマ「動物と語らう森」で人と動物の共生をぶれずに主張してきたつもりである。



たいようと父親のジュン